

10月1日～4日、私達3年生は院生2人を混じえ、栗原先生の指導で3泊4日の淡路島巡検に出かけていった。淡路島は、佐渡島・奄美人島に次いで大きな島であり、人口は約17万6千人、瀬戸内式気候のため温暖で雨が少ない。

初日、私達は明石からフェリーで島北端の岩屋に到着した。時間にして30分かからず、あっという間だった。途中、島の中心地洲本に立ち寄り淡路文化史料館を見学した。そこでは淡路島の歴史、民俗、祭りのほか、島の風土に育かれた美術や文芸が展示されており、特に伊弉諾・伊弉冉尊の国造の神話が心に残っている。それから、洲本の町中を実際に歩いた後、巡検を通して根拠地とした南淡町福良へ向かった。南淡町は淡路島の南部にあって、東は608mの論鶴羽山を山峰とする論鶴羽山系、西は273mの南辺寺山系に囲まれて平野が展開している。人口数22,271人（昭和60年現在）の町である。第1次産業は従事者32.8%（55年）で、純生産高17.6%を占める。中でも、たまねぎ栽培と酪農の盛んな農業が群を抜き15.6%を占めている。

早速、その夜からゼミが始まり、文献レポートと昼間洲本の町並みを歩いて感じたこと、例えば上下水道や医療、また国道等についての意見がかわされた。

2日目はまず南淡町役所に出かけた。役所最大の関心は鳴門大橋の架橋に伴って、いかに観光客を確保するかということにあった。つまりそれが所得の増加につながり、町の財政を潤おし、発展することができるからである。次に、私達は三原郡農業協同組合へ出かけた。農家数はほとんど変化ないが、第2種兼業農家の増加が著しいのは他の農村とかかわらない。依然として厳しい農畜産物輸入自由化の圧力、水田利用再編対策、各種補助金の削減、価格の混迷等に加えて、鳴門大橋の開通に伴って、四国農業との産地間競争に打ち勝つことが当面の基本方針であった。「三原営農方式」や「手間替農業」という特殊な方法が工夫されて

いる。前者は水稻+タマネギの二毛作以外に水稻+レタス、キャベツ、ハクサイを2月までに収穫し、その後作に4～6月収穫のレタス、キャベツ、タマネギを植え付けて、5毛作くらいまで行う方法である。特にタマネギは12月までに植え付けなければならなかったのが、2月に植えても品質、収量が変わらない技術を開発したことは一大成果であった。後者は、兼業化が進められて余った農地を、専業及び一種兼業農家が冬期間借りて野菜栽培を行うやり方である。借り主は貸賃の代わりに地主（土地もちサラリーマン）に苗を作ってやり、機械も貸す、従って地主は農機具を持たずに米作ができ、土地を手放さないですむ。こうして遊休田畑は一枚もなく、年中緑一色となる。

北阿萬の酪農農協では、牛乳のつくり方や経営方法、消費の実情について説明していただいた。畜産部門は全般的に停滞基調にありながらも、肉牛、鶏卵、肉豚の生産販売一貫体系が確立され質がブランド化されている。私達は、それから鳴門大橋を眺望できる場所までバスをまわしてもらった。青い海が輝き、陸地の黒とコントラストをなしてきれいだった。

3日目はそれまでと違って、午前中は酪農農家とたまねぎ農家と線香工場の3つに、午後からは漁協と自治会長さんのお宅の2つに分かれて行動した。私は線香工場と漁協に行ってきた。線香製造業は北部の津名郡一宮町江井が中心地で、それは嘉永3年（1850）ごろ、田中辰蔵が泉州堺から線香づくりの熟練工を迎えたのが始まりとされている。西浦は冬季、季節風が厳しく、そのため船乗りの多い漁師町の門戸が閉ざされてしまうという冬枯れ救済対策を考えてのことだった。立地条件のよさに支えられ、現在では家内工業から近代設備の工場まで町内一帯に点在するほどに発展した。私達は、製造過程をつぶさに見学することができ、とても面白かった。また、漁協では資産について、かなり具体的な数値まで明らかにしていただいた。ここでも四国の漁業との競合が課題に

なっているが、当福良漁協に限れば漁船漁業、水揚量共に大きく伸びていて、活気にあふれていた。

ゼミでは各々見聞してきた知識を補い合って理解を深めた。行政の側からのデータだけでなく、実際に農家のお宅、あるいは民間サイドの意見を聞くことによって、実情が把握でき、また公平な目を培うこともできた。

最終日の10月4日、またとないチャンスだったので人形浄瑠璃を鑑賞し、その帰りバスで鳴門大橋を渡ってきた。この日だけ思わしくなかった天候のせいか、渦潮は私達が期待していたほどはっ

きりしていなかった。が、小さいながらも渦を2、3眼下に見下ろすことができ、私達はしばらくの間騒然となった。

3年生最後の巡検は、こうして大変順調に過ぎた。現地の方々からは大変厚い御好意を受け、中には、地元の新聞に乗った私達の記事を見て、貴重な人形浄瑠璃の写真を見せて下さりに、わざわざ宿まで訪ねてみえた方まであり、とても有難かった。淡路島の印象を一言でいうと、島でありながらも本上に劣らぬ活力を持ち合わせた島だ、ということになる。

(10月1～4日 栗原教官指導)

足尾・日光巡検

木村 真理子

9月4日から6日まで、1日目は足尾町2、3日目は日光市という日程で、井内先生の御指導による足尾・日光巡検が行われた。足尾駅集合だったため、赤字ローカル線で廃止の対象となっている足尾線に乗って、足尾へと向かった。

はじめに足尾駅から足尾町役場まで行き、足尾町職員の方から公民館で足尾町の現状についてのお話をうかがった。足尾町は足尾銅山により有名であるが、昭和48年に銅山が閉山となり、現在は過疎化の問題に苦しんでいる。足尾町では人々が町にとどまるための基盤がないことが人口減少を招いているので、町は企業誘致などを行っているが、なかなかうまくいかないということだった。このヒアリングの後には足尾町のマイクロバスで案内していただき、鉱山跡と製錬所付近を見学した。鉱山跡は一步入るとたいへん寒く、水が至る所からしみ出しており、採掘の様子を示している人形と共にかつての鉱山内での採掘作業の苦勞を思い知らされた。製錬所付近は煙害のために植生がなくなっており、荒れ果てた山々の風景は信じ難いほどであった。1日目はこれで行動を終え、マイクロバスで日光の清滝まで送っていただいた後、路線バスで中禅寺湖畔の菖蒲ヶ浜の宿舎へ向かった。

2日目は、まず湯元温泉へ行き湯元や温泉街を見学した後、湯ノ家旅館で御主人に湯元温泉の歴

史、現状、湯、湖の水質汚濁問題についてお聞きした。御主人のお話は、開発を進めようとする立場からのお話であり、自然保護も必要だが開発もしたいという気持ちがうかがわれた。湯元から三本松までは、美しい風景を楽しみながら戦場ヶ原の自然研究路を歩いた。午後は、戦場ヶ原開拓村で開拓村組合長から開拓の歴史と現在についてうかがった。戦場ヶ原に開拓村があって農業が行われていることはあまり知られていないが、開拓村の人だけでなく、埼玉方面の農家が戦場ヶ原の農地を借りて花卉などの山上げ栽培を行っているということであった。このヒアリングの後には班に分かれて、戦場ヶ原の農地利用状況についての調査を行った。このような調査を行うのは初めてで、畑の間をずいぶん歩き回り疲れはしたものの、けっこう楽しみながら調査した。また、班によっては農家の方からすいかをごちそうになりながら、お話をしていただいたりしたようだ。

3日目は、午前中に栃木県中禅寺ダム管理事務所ではヒアリングとダム見学を行った。中禅寺ダムは治水と利水の両方の目的により建設された多目的ダムである。このダムにより華厳ノ滝の落水が停止することは減ったが、年間を通して観瀑できるようにするという日標は達成されていない。ダム見学の後は自由観察があったので、いくつかのグループに分かれて華厳ノ滝や二荒山神社を見て